

愛知サークル2月例会報告

2021年2月7日(日) 桜花学園大学 参加:6名

◎ ブックレット 第2部

第2部の中で、発見したことや疑問に思っていることの発表と学びあい。

- 文学を読む元々の目的は、「イメージの変化」ということについて
読むことによって疑似体験するというのは読みの「自動化」である。それでは、深く内容に入り込み、本質をつかむことはできない。そして、イメージを変化させることは一人ではできない。だから、集団でいろいろな考えをもっている人がいる中で追求することにより「深い学び」が成立する。
- P13のBの授業のような発言をする児童は、どうすれば出てくるか。
子どもが主体的になるためには、4、5月で問題づくりを徹底的に行う。始めは教え込む必要がある。そしてクラスの中で、ABCのA層の子どもを鍛える。その時は教師がどんどん前へ出る。子どもが育ってきたら、クラスの中で転移が起こる。次第に教師は引いていき、子どもたちで追求できるようにしていく。発言力のある子をお手本になるようにしていかないと、いつまでもできる子しかできない。
- 展開の核について
全員が心から「変だ、おかしい」と思って追求させるにはどうすればよいか。そのためには、何か宝物が隠れている。それを探す文化を教室につくる必要がある。そのためには、共通の価値観がほしい。4月の初めに自分の「十八番」で、全員参加で体験させておかしいと思えない子も巻き込む。教師が粘り強く言い続ける。

I 文学教材の追求

1. 「世界一美しいぼくの村」(4年) 記録と映像

「羊を飼ってもらったヤモが、「大喜びで」村へもどったわけを考えよう」の発問に子どもは答えられているが、その発表内容は事前のワークシートに書いてあり、子どもはそれを読んでいる。また、全児童の意見を座席表に書いたものが全員に配られているので、子どもは発表者を見ているが、内容は座席表を見ればわかるので形式的に発表者を見ているだけになっている。本当に友達の見聞を聴いて、自分との違いを考えてはいない。

教師は、子どもの言うことが事前に分かっているので、どの意見を使って授業をどうしようかと考えておくべきだった。また、子どもの発表を聴いているだけで、「本当にそうなのか。」と問い返すこともなかった。子どもは発表しただけになってしまっている。子どもに意見を出させるなら、それを使ってどうまとめていくかをやるべきである。全員に発表させることが全員参加なのではない。聴いて反応するだけでも全員参加になる。

子どもの中に「お兄さんが心配なのに、大喜びで帰ってきたのは変」という意識はあったのか。子どもの問題に対する意識があったかどうか、大事なところである。

2. 「世界一美しいぼくの村」(4・5・6年) 板書と映像

「ハルーン兄さんならだいじょうぶ、きっと春には元気に帰ってくるとヤモは信じています。でも、むねがいっぱいになるわけは何だろう」と、むねがいっぱいになる原因を何かと話し合った。そこで、心配は残っているかないかと対立させているのは疑問。心配は残っているのは当たり前なので、南の方の戦いはかなりひどいということをもっと想像させた方がよい。

3. 「クロツグミ」(3~6年) 石井先生の授業に学ぶ 記録と映像

石井先生の授業映像を見て、真似したいところはどこかという視点で記録を見て話し合った。

- テンポがよく、子どもが納得する例えなどで子どもにあった話や、子どもを揺さぶる術を心得ている。
- 始めに楽しい雰囲気づくりをしている。自分の中の価値観と目の前の子どもとのライブなので、目の前の子どもの動きと価値観が瞬時に繋げていく必要がある。
- 教師の勢いで雰囲気をつくる必要がある。それができているので、子どもに流されることなく

コントロールできている。

- 違う意見を言う子を上手に取り上げ、それを要求していく。友達との違いを見つけることの大切さを価値として入れていく。
- 石井先生ができて、なぜ自分はそれができないかを考えなくてはいけない。知識としては知っているのにできていない自分の実践を振り返らないといけない。

Ⅱ 「表現教材」の追求

【音読】「くまさん」(教師)

- 子どもに教師の音読を真似させてみたらいいのではないか。

【図工】「10歳の自分」(4年)

- 顔は目で決まる。目が、ネコの目になっている。目だけでも練習するとよい。
- なぜ、難しい自画像を版画でやろうとするのか。光と影を学ばせたいなら、もっと他の題材を探せばいい。